胡適の人生観について
――イプセン主義を中心として――

陳　玲玲

１．はじめに

胡適の人生観としてのイプセン主義[1]は、彼のアメリカでの留学期間に形成されたものである。アメリカにおける 20 世紀初頭の社会状況は、胡適がイプセンを選択することに決定的な影響を及ぼすこととなったと思われる。それにもかかわらず、胡適がイプセンを読んで、それに基づいて形成したイプセン主義は、西洋の知識人のものとは異なる人生観を示している。胡適のイプセン主義の内的精神構造は、中国的なのである。もっと詳しく言えば、それは五四時代の中国知識人が痛烈に批判しても抜けきれない儒学の伝統と繋がっている。本稿では「イプセン主義」（『新青年』第 4 巻第６号、1918 年 6 月）のテクストを考察して、また胡適のほかの文章を参考にして、彼のイプセン主義という人生観の特徴を追究したいと思う。

２．アメリカにおけるイプセンの受容

『胡適留学日記』によれば、胡適が最初にイプセンを読んだのは 1914 年である[2]。同年、胡適は英語の講演「イプセン主義」をコーネル大学の「哲学会」で読み上げた。『新青年』の「イプセン号」（1918 年 6 月）に掲載された「イプセン主義」は、その講演に基づいている。1917 年 7 月 10 日、胡適は上海に到着し[3]、7 年（1910－1917）離れていた中国へ帰った。この状況を見ると、胡適のイプセン主義は、アメリカ留学期間に形成されたと思われる。そして、1 つの問題がここで問われてくる。なぜ胡適はイプセンを選んで、イプセン主義を自分の人生観として選びとったのか。

1910 年、清朝を打倒する辛亥革命の前年 8 月 16 日、19 歳の胡適（1891－1962）は国際的大都市上海から蒸気船シャイナ号でアメリカへ留学に渡った。当時 20 世紀初頭アメリカは、急速な工業化・都市化の進展に伴って生じた経済的・社

会的問題にどのように対応するかが、重要な政治課題として意識され、さまざまな改革が唱えられ、革新主義の時代を迎えていた[4]。また、経済力の上昇、女性の高等教育の普及にともない、禁酒運動など社会改革運動への女性の組織的参加、婦人参政権運動など、女性が社会の多様な局面で男性との平等を求めて、その地位の修正を迫るようになった。＜女性の問題＞は 20 世紀初頭アメリカの最も熱い話題の 1 つになった。

さて、アメリカ近代劇は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、イプセン、ストリンドベリ、チェーホフが登場して近代化を達成していたヨーロッパ演劇を意識し始め、それを理解し咀嚼して成立した。その情況について、福田陸太郎氏は次のように述べている。

> イプセンの『人形の家』A Doll's House （1879）がアメリカではじめて上演されたのが 1889 年であり、20 世紀にはいると、1902 年に 1 回、1905 年に 5 回、1907 年には 2 つの劇団が通算 66 回の上演をおこなっている。これはイプセンの他の劇についても同じで、20 世紀にはいると急激に彼の作品の上演回数が増えて、1907 年には『人形の家』と他 3 つの作品が通算 194 回も上演されている。これによって、イギリスのバーナード・ショー George Bernard Shaw （1856－1950）や、スウェーデンの劇作家ストリンドベリ August Strindberg （1849－1912）なども紹介されるようになり、観客も劇作家もただ単なる娯楽としての演劇から、1 つの問題を訴えるいわゆる「問題劇」problem playsへの関心を示しはじめたのである[5]。

また、長田光展氏の「アメリカの近代劇―メロドラマからオニールまで」によれば、アメリカ演劇は 1910 年代中葉以降、同時代の文化と社会に対する強い批判的関心、時代の新しい思想、哲学への積極的な受容態度、フェミニズム思考の台頭など、新しい特徴が現われる[6]。

このような社会背景の下で、イプセン問題劇を読むことは、文学、特に劇文学が好きな胡適[7]にとって、自然ななりゆきであると言えよう。アメリカで、胡適は始めの 2 年（1910 年 8 月―1912 年 8 月）、コーネル大学で農学を学ぶが、やがて 1912 年 9 月、同大学の文学部に転じた。『胡適留学日記』によれば、1914 年 7 月 18 日、友人と読書会を結成する[8]。会員は少なくとも、毎週 1 冊の英語の文学書を読み、週末に集まって、討論するということを決めた。同日の日記では、「読書会」を含めて 7 つの覚え書が書かれ、主にドイツのハウプトマン（Hauptmann）の劇をめぐって、ヨーロッパの問題劇の名家、ノーベル賞、遺

伝説などに論及し、3 つの覚え書が、イプセンに言及している。先に述べたように、「イプセン主義」はコーネル大学の「哲学会」で読み上げた英語の講演であるが、この「読書会」で読み上げた可能性もあると思う。また、1915 年 7 月、胡適は『甲寅雑誌』の編集者に宛てて、次のように書いている。

> 最近 50 年来ヨーロッパ文学のなかで最も勢いのあるのは、演劇であり、詩と小説は第 2 流に転落している。名家例えば、ノルウェーのイプセン（Ibsen）、ドイツのハウプトマン（Hauptmann）、フランスのブリュー（Brieux）、スウェーデンのストリンドベリ（Strindberg）、イギリスのバーナード・ショー（Bernard Shaw）、ゴールズワージ（Galsworthy）、ベルギーのメーテルリンク（Maeterlinck）など、皆演劇をもって、世界に名を知られている。現在我が国の演劇界は過渡期を迎えており、世界的名著をモデルとする必要がある。私はイプセンの『人形の家』あるいは『国民の敵』を翻訳したいと強く思うが、何時脱稿できるか、まだわかりません[9]。

胡適は異文化[10]の中で 20 世紀初におけるアメリカの時代潮流をとらえた。これは胡適の生涯の精神的恋人となったウィリアムズ女史（Edith Clifford Williams 1885～1971）から受けた影響と関係があると思う。ウィリアムズ女史は知的魅力に富んだアメリカの画学生で、胡適より 6 歳年上である。彼女の父親はコーネル大学の地質学教授であり、夫婦は胡適に対して礼をもって遇した。そのため、胡適はウィリアムズの家をよく訪問したようである[11]。『胡適留学日記』によれば、1914 年 6 月 20 日、「吾友ウィリアムズ女士」が初めて登場する。胡適は西洋の婚礼を見たことがないので、彼女と一緒にウィリアムズ女史の女友達の婚礼に参加した。これは二人の長い 50 年に及ぶプラトニックラブの始まりで、劇的な一幕であろうか。『胡適留学日記』を読むと、胡適とウィリアムズ女史は、東西文化から人生問題まで何でも話し合いをした親友だという印象が強い。彼女の影響を受けて、胡適はイプセンの＜家庭の問題＞、＜女性の問題＞についての『幽霊』、『人形の家』に興味を深く持った可能性がある。

３．胡適の「イプセン主義」（『新青年』第 4 巻第 6 号、1918.6）について

胡適の「イプセン主義」には次の 6 つの段落を含んでいる。①イプセンの文学や、イプセンの人生観は、ただ写実主義（リアリズム）である。②イプセンは家庭の悪徳に批判の矛先を向ける。③イプセンは社会における 3 つの勢力、すなわち法律、宗教、道徳に疑いをさしはさむ。④イプセンは＜社会＞と＜個

人＞の＜相互損害＞という問題を探求する。⑤イプセンの政治主義は、無政府主義から、世界主義にまで変化している。⑥個人は充分に自己の天才性を発展させ、個性を発展させるべきである。（また、個性を伸ばす 2 つの条件があるべきである。第 1 に、個人をして自由意志を有らしめること。第 2 に、個人をして自己の行為に責任を負わせること。）

①は全文の前提となる基礎、⑥は結論で、真ん中の 4 つは、例証である。それで、イプセン主義は写実主義を基礎とする個人主義によって構成されると言えよう。

清水賢一郎氏は胡適の「イプセン主義」について、「方法としての“ truth-speaking ”」と「健全なる個人主義」の両面から論じている[12]。清水氏は「胡適の捕らえたイプセン文学の根本的方法とは、誠実な思考（honest thinking）と誠実な発言（honest speaking）に外ならなかったのだ」、「胡適『イプセン主義』のいわゆる『写実主義』とは、文学的な手法や作風の派別などではなく、彼自身の言葉を借りれば 1 つの『人生観』『宗教』とも言うべきものであったのだ」と指摘している[13]。また、清水氏はこの「人生観」について、次のように述べている。

> ウィリアムズ女史が『妥協論』を紹介したのは胡適の発言＝信念を西洋人の立場から引証するためであったが、こうして女史との交際・対話を通じて、中華世界と西洋世界の別を超えた普遍的倫理＝方法として胡適が掴み取ったのが、世俗に妥協せず自己の信じる一貫性（wholeness/consistency）に基づいて真実を語ること（truth-speaking）だったのである[14]。

これに対し、胡適の写実主義的人生観を形成するに至るもう 1 つの要因が、中国の現実に存在する、と筆者は思う。胡適は「イプセン主義」の冒頭でイプセンの最後の作品『私たち死んだものが目覚めたら』から「人の体、獣の顔」という場面を引用して、それを借りてイプセンの「写実主義」を説明している。そのうえで、彼は中国の現実に焦点を合わせて、次のように述べている。

> 人生の大病根は世間の真実の現状に、目を開けたくなく、見たくないことにある。明らかにまともな人間がいない社会であるが、われわれはわざと聖賢礼儀の邦と言っている。明らかに汚職官吏の政治である。ところが、われわれはその功績や人徳をむやみにほめたたえる。明らかに薬ではもはや治らない大病であるが、われわれは何の病気もないと言っている。病気

を完治させようとすれば、まず病気があることを認めるべきである。政治をよくさせようとすれば、まず今の政治がよくないということを認めるべきである。社会を改良したければ、まず今の社会にまともな人間がいないということを認めるべきである。しかし、これがみんなわかっていない[15]。

胡適は「人生の病根」、もっと正確に言えば長年の中国人の病根を、ずばりと突いている。このような現実に対して、イプセンのように、「正直にものをいおうとし」、「社会の様々な腐敗し汚れた真実の情形を描き出し、人々につぶさにみせた」[16]、という「写実主義」が何よりも必要である。それ故に、イプセンの創作方法「写実主義」は胡適の「人生観」へと変身している。さらに、このような「人生観」は五四時代のたくさん知識人に支持された。

それでは、この「写実主義」と次の例証および結論の関係が問われることになる。「イプセン主義」の第 2 段落で＜家庭の悪徳＞が例証 1 として挙げられている。イプセンの代表作『人形の家』は 1879 年に出版された。その婦人解放思想によって当時の社会に衝撃を与えた。この作品は女性解放の聖書と見なされてきた。しかし胡適の場合は、『人形の家』のキーワード「家」を採って、家庭における私利私欲、奴隷性、偽道徳、気が弱い（面子のために）など 4 つの悪徳を暴き出すものと考える。これこそまさに、中国の家庭の真実の情況である。この点から、胡適は『幽霊』を家庭問題劇[7]として読み、アルヴィング夫人をノラと対照する形で、家庭の犠牲者ととらえている。

イプセンが社会における 3 つの勢力、すなわち法律、宗教、道徳に疑いをさしはさむのは、「イプセン主義」の例証 2 として述べられている。胡適は、イプセンの写実主義の奥に懐疑精神、批判的態度があることを強く感じとった。胡適は懐疑精神、批判的態度を持つことが大事だと考える。彼は「介紹我自己的思想」（1930）のなかで、次のように述べている。「私の思想には 2 人の影響が最も大きい。一人はハックスレ、一人はデューイである。ハックスレは私に懐疑を教え、十分の証拠がないことは一切信じないことを教えてくれた[18]。」したがって、胡適は特にイプセンの劇作のなかに懐疑精神、批判的態度がある「問題劇」に感心を持っている。また、このような懐疑精神によって、胡適は中国の伝統文化に次のように質問している。

①習俗が伝えられる制度、風俗に対して、「この制度は現在なお存在の価値があるか」と問うべきである。②古代から遺伝した聖賢教訓に対して、

「こうした言葉は今日でも依然として間違いでないか」と問うべきである。③社会でうやむやに公認された行為と信仰に対して全て、「みんなが公認しているものは、間違いでないか。[中略]」と問うべきである[19]。

興味深いのは、上の 3 つの質問はイプセンの指摘した法律、道徳、宗教と対応するものともなることである。懐疑、批判を通じてこそ、世間の真実の状況を把握するに至る。イプセンはこのような懐疑精神、批判的態度を彼の人物（例えばノラ、アルヴィング夫人、ストックマン医師）に与えている。もっと多いのは、彼の劇のなかに法律や、宗教や、道徳への懐疑、批判が自ら現われている場合である。これこそが、イプセンの写実主義の神髄として、胡適に捕らえられている。

胡適の「イプセン主義」における例証 3 は、イプセンが＜社会＞と＜個人＞の＜相互損害＞という関係を探求することである。例証 1 と 2 は、イプセンが写実主義によって、描きだした世間の真実であると言えるなら、例証 3 はこのような「真実」をきたす原因を明らかに示すものである。個人が社会に抑えつけられて、懐疑、批判的意識を失えば、個性のない人間になる。結局、社会自身も生気を失ってしまう。そのために、家庭の悪徳、偽道徳、法律問題、宗教問題が次々と現われる。イプセン劇のなかで、個人の悲劇は 2 つの表現形式がある。1 つは、個人が社会に従順となり、社会の犠牲になる。例えば、アルヴィング夫人、象徴的意味を持つ「野鴨」は、この類に属する。もう 1 つは、社会に反抗して、失敗する。『国民の敵』のストックマンのようにである。胡適はこれについて、次のように述べている。

個人の能力は有限であって、社会のライバルになれない。社会は個人に言う。「あなたたちは私に従順なものが生き、反対するものは死ぬ。従順なものは賞を与えられ、反対するものは罰せられる」。社会に反対する青年たちは、彼ら一人一人が家庭に叱られ、友達に憎まれ、社会に侮辱され、追放される。また、社会の意旨にへつらう人々を見ると、一人一人は官位が高くなり、金持ちになる[20]。

例証 3 はイプセン主義における重要な内容であると言える。

胡適の「イプセン主義」における例証 4、無政府主義から、世界主義にまで変化しているイプセンの政治に関する主義は、例証 3 の重要な補充であると考える。国家は社会の機能的部分としての役割を担い、さらに、ときには国家は

社会の上に聳えた幻想の共同体となると思われる。また、国家が消失する前に、国家に反対するのは、社会に反対することよりも、もっと困難である。国家のためにさまざまな名目にかこつけて、個人の利益を損なうことは、専制に至るであろう。したがって、イプセンは鋭く、「国家はまったく個人の大害である」と喝破している[21]。そのために、胡適は「イプセンは従来、狭義の国家主義を主張せず、狭義の愛国者ではない」と指摘している[22]。さらに胡適は中国の若者に次のように呼びかけている。

> 現在ある人はあなたたちに言う。「あなたたちは個人の自由を犠牲にして、国家の自由を追求しなさい。」しかし私はあなたたちに言う。「あなたたちが個人の自由を争うのは、国家のために自由を争うのである！あなたたち自身の人格を争うのは、国家のために人格を争うのである！自由平等の国家は決して、ひと群れの奴隷根性の人々によって建設できるわけがない[23]。」

中国では従来から社会秩序、国家利益を強調した。それに対し、個人を重視するこのような議論は、その当時において奇想天外なことである。この点から見て、胡適はイプセンの個人主義を深く認識していると言えよう。

以上の 4 つの例証によって、胡適は、イプセンの写実主義を基礎とする個人主義（真実を語ることに基づく個人主義）の内容を説明している。胡適の目的は写実主義だけではない。このように真実の暴露をすれば、「イプセン主義」は消極的傾向に陥る可能性があったと思われる。イプセンの価値は、社会問題を提出し世間の真相を暴いた上で、「個人は充分に自己の天才性を発展させ、個性を発展させるべきである」という積極的主張をするにある、と胡適は考える。「イプセン主義」で胡適は、『海の夫人』（1888）のエリーダが自由を手にしたときに発生する意志と責任に目覚めることを通じて、「個性を伸ばす 2 つの条件があるべきである。第 1 に、個人をして自由意志を有らしめること。第 2 に、個人をして自己の行為に責任を負わせること」という見解を述べている。それでは、イプセン主義は 2 つの内容を含んでいる。つまり、写実主義と、それを基礎とする個人主義（あるいは個性主義）によってイプセン主義は構成される。写実主義は懐疑精神、批判的態度によって、世間の真相を究明する。個性主義は世間の真相に対して積極的態度を取って、自立した個人として自分を救う。そのため、社会と個人が共に健康に発展できる。これこそ、胡適のとらえたイプセン主義である。

４．胡適の人生観

胡適の人生観としてのイプセン主義は、アメリカでの留学期間に形成された。しかし、この人生観は中国的な理念に基づいて形成されていると考える。胡適は「社会の最も大きな罪は個人の個性を踏みにじることにある」[24]と指摘しながら、しかし、「社会的不朽論」を提出している[25]。それによれば、個性発展の最終の目的は、社会の発展にある。つまり個性の発展はそのまま社会へと連動されていくということを強調している。それ故、胡適の唱道した個人主義は、イプセンの個人主義[26]と違うところがあると言えよう。「イプセン主義」における胡適の分析のとおり、＜社会＞と＜個人＞が＜相互損害＞する関係にあるので、イプセンは最も「ある種の真に純粋な為我主義」を望んでいる。換言すれば、社会ではなく個人のために、個性を発展させるということである。個人は起点であるが、しかし同時に終点でもある。その結果として、社会に利益をもたらす。さらに言えば、イプセンの目的は個人である。イプセンはいつも個人の立場から社会を批判の標的にしている。胡適は「イプセン主義」のテクストのなかで、イプセンの個人主義を正しく分析している。しかし、人生観としてのイプセン主義の場合は、個人は最も重要な起点であり、終点ではない。終点は、個人のかわりに「社会的不朽」である[27]。

胡適の人生観は「修身齊家治国平天下」[28]という中国伝統的な倫理観念と一脈通じていると思われる。実際に、胡適の「イプセン主義」のなかには「修齊治平」（「修身齊家治国平天下」の略語、陳注）というような文脈が読み取れると考える。＜個人は充分に自己の天才性を発展させ、個性を発展させるべきである＞という結論は、胡適の唱道した「修身学」と言える。（ただし、明らかにこの「修身」の内容は伝統とまったく異なっている。）論証の部分で、＜家庭問題＞が一番先に提出されたのは、「齊家」が「治国平天下」の基礎だからである。次の社会における３つの勢力、及び＜社会＞と＜個人＞の＜相互損害＞などの問題は、「治国」の範囲に属すると思う。＜無政府主義から、世界主義にまで変化しているイプセンの政治に関する主義＞については、まるで「平天下」の境地にも達するというものだと言ってもいいであろう。それで、「イプセン主義」における文脈は「齊家治国平天下」「修身」になる。それは「修身齊家治国平天下」のなかで「修身」が最も基礎になるという理念と共通している。

胡適は後に人生観としてのイプセン主義について次のように述べている。「イ

プセンは 19 世紀ヨーロッパの個人主義の精華をもっとも体現しうるので、私はこの文章（「イプセン主義」、陳注）のなかで、ただある種の健全なる個人主義の人生観を書いているだけである[29]。」「個人主義」の前に「健全なる」を付け加えるのは、「真に純粋な為我主義」ではなく、自己を鋳造して有用な器としながら、社会に貢献するからである。さらに、「自己を鋳造して、自由独立な人格を持ってから、あなたは自然に不満足であったり、現状に不満であったり、真実を勇敢に言ったり、社会の腐敗情況を勇敢に攻撃したりすることになる。一人の、『富や地位に惑わされず、貧しく社会的地位が低くても志しを変えず、武力や権勢にも屈服しない』（富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈）のようなストックマン医師になる[30]。」と述べている。これから見て、胡適の「修身学」は「健全なる個人主義」と「写実主義」（誠実な思考honest thinkingと誠実な発言honest speaking）を内容としていると言える。このような「修身」は「修齊治平」という中国伝統的な倫理体系に新たにかなめ石を入れ、イプセンの個人主義を借りて、中国の儒学と重なるところがあると思われる。そのため、それは五四時期の知識人に広く認められたのである[31]。

５．おわりに

胡適は自分の人生観を「健全なる個人主義」とはっきりと指摘している。それはテクストの「イプセン主義」を基本内容としている。胡適はイプセンを読んで、7 年間のアメリカでの留学体験を通じて、中国儒家文化のなかでは個人としての中国人が存在しない、という欠点を痛烈に認識させられた。胡適は「個人主義」を唱道したので、「中国の文芸復興の父」と称されている。しかし、胡適はアメリカへ留学する前 19 年間の少年と青年時代において、たくさんの中国古典を熟読するとともに、伝統的な「修齊治平」によって人生の道に導かれていたのであろう。その故、「イプセン主義」という人生観は胡適が持っている伝統的人生観にとって、血を換えるが、しかし、骨格を変えられないものであった。ただし、新鮮な血液がなければ、骨格だけで、活力があるわけがない。これは清末の改革派[32]が唱えた「中学為体、西学為用」 (中国の精神を維持しながら、西洋の技術を取り入れる)という文化的信念によく似ている。確かに、このような人生観は時代の産物である。詳しく言えば、それは 20 世紀初頭における中国伝統的文化が西洋文化と衝突して、生まれた新しいものであると言えよう。それ故に、それは五四時代の多くの知識人に認められ、さらに、いまにいたる

まで影響が残っていると思われる。胡適が、「東洋ないし中国と西洋との間に精神上の根本的相違は存在しないという基本認識に基づいて」[33]、全力で人類の認識における共通点を探求しようしたために、結果として、「イプセン主義」は胡適により書かれ、その中でイプセンを中国式に、個性的に読解することになった。

注

1　胡適「介紹我自己的思想」（1930.11.27、欧陽哲生編『再読胡適』大衆文芸出版社 2001 P.160）によれば、胡適はそのなかで、「『科学と人生観』序」、「不朽」と「イプセン主義」など 3 つの文章が彼の人生観、宗教を代表すると述べている。

2　『胡適留学日記』3 巻 43 則「記白里而之社会名劇『梅毒』」（1914 年 2 月 3 日）安徽教育出版社（1999）P.157

3　前出「介紹我自己的思想」、また清水賢一郎『明治日本および中華民国におけるイプセン受容―恋愛・貨幣・国民国家のドラマ』(東京大学人文社会学研究科博士論文、1994)第三章注 24 を参照した。

4　有賀貞『アメリカ史概論』東京大学出版社（1987）

5　福田陸太郎『アメリカ文学思潮史―社会と文学』（編著）中教出版株式会社（1975）P.337

6　長田光展『演劇の「近代」―近代劇の成立と展開』中央大学人文科学研究所編（1996）「アメリカ演劇は 1910 年代中葉を境にして、それ以前と以降では作品の質と関心のありかたにおいてかなりはっきりとした相違が見られる。それ以前の作品にはなく、中葉以降の作品において顕著になるのは、同時代の文化と社会に対する強い批判的関心、時代の新しい思想、哲学への積極的な受容態度、フェミニズム思考の台頭、特に表現主義的作品群に見られるヨーロッパ 演劇との連動と視野の飛躍的な拡大などである。」

7　前出『胡適留学日記』のなかに、文学に関する読書記録が多い。

8　清水賢一郎「胡適―『健全なる個人主義』を貫いたリベラリスト」(『しにか』1996.11）にも次の指摘がある。「そのころ友人らと語らって近代文学、特に近代劇を中心とする読書会を結成、イプセンの作品を読みあさっていたらしい。彼の文学革命の構想には、留学中に愛読したイプセンが様々なヒントを与えたものと思われる。」

9　「『甲寅』の編集者へ」（1915 年 7 月）初出台北『伝記文学』（1968.1）『胡適文集』7 巻、人民文学出版社（1998）P.22

10　藤井省三氏は「ニューヨーク・ダダに恋した胡適―中国人のアメリカ留学体験と中国近代化論の形成」（沼野充義編『多分野交流演習論文集　とどまる力と超えゆく流れ』東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室、2000）のなかで、「胡適は安徽省の小さな町から租界都市上海に出て西欧文明の息吹に触れた。その胡適の留学先が、隣国の東京ではなく太平洋の彼方の新大陸アメリカであったことは、その後の彼の自己形成および近代中国文化のゆくえに大きな意味をもったといえよ

う。」と指摘している。

11　前出藤井省三「ニューヨーク・ダダに恋した胡適―中国人のアメリカ留学体験と中国近代化論の形成」に詳しい。

12　清水賢一郎『明治日本および中華民国におけるイプセン受容―恋愛・貨幣・国民国家のドラマ』、前出。

13　前出『明治日本および中華民国におけるイプセン受容―恋愛・貨幣・国民国家のドラマ』P.25

14　前出『明治日本および中華民国におけるイプセン受容―恋愛・貨幣・国民国家のドラマ』P.25

15　「イプセン主義」欧陽哲生編『再読胡適』大衆文芸出版社（2001）

16　前出「イプセン主義」

17　毛利三弥『イプセンのリアリズム―中期問題劇の研究』（白凰社 1984 PP.256,265）によれば、『幽霊』のもともとは「三幕の家族劇」という副題が付された。

18　前出「介紹我自己的思想」

19　胡適「新思潮的意義」（1919）前出『再読胡適』P.54

20　前出「イプセン主義」

21　前出「イプセン主義」

22　前出「イプセン主義」

23　前出「介紹我自己的思想」

24　前出「イプセン主義」

25　胡適は「イプセン主義」を発表した翌年、「不朽―私の宗教」（1919）（前出『再読胡適』）のなかで、「小我」と「大我」という概念を提出している。簡単に言えば、「小我」は個人であり、どうしても死ななければならない。「大我」は「小我」に対して、永遠不朽で、社会性を持って、歴史のなかに存在しつづけている人類であり、つまり「社会的不朽」である。したがって、胡適は次のように述べている。「私の現在の＜小我＞は、永遠不朽である＜大我＞の無窮の過去に対して、重大な責任を負うべきである。永遠不朽である＜大我＞の無窮の未来に対しても、重大な責任を負うべきである。」また、「『科学と人生観』序」（1923）（前出『再読胡適』）のなかで、胡適は再び＜大我＞つまり人類が不滅という観点を強調しながら、死後の＜天堂＞や＜浄土＞を求める宗教は私利私欲のものであると指摘している。

26　①フランスの翻訳家プロゾル（Le Comte Prozor）は『ブラン』の序のなかでイプセンの個人主義について、次のように指摘している。
私はイプセンの身上から「スカンディナビア的な個人主義」の人格化を見る。その個人主義は彼の作品のなかで繰り返して宣揚、説明されているものである。[中略]（それは）意志・精神の独立のために独りで奮闘することである。[中略]イプセンはキルケゴールと同様に、こうした一切を、平均主義の体系によって人間を弱く、無力にさせる行動のせいにしていた。この行動は勝手にわれわれを裁断し、われわれの肢体を破って、同じの型に入れて、個人の見解と動機を崩した。そしてただ 1 つのものを残した。それは利益というものである。（高中甫（編選）『イプセン評論集』外語教学与研究出版社 1982 PP.243-245）

②イギリスのルーカス（F. L. Lucas 1894-1967）は『イプセンとストリンドベリのドラマ』のなかで、イプセンの個人主義は「真の自我を発見して、さらに真実を保持するものである」と指摘している。また、イプセンの思想の内容について、次のように概括している。
思想と生活における虚偽をとり除く。
偽道徳によって自己を臆病な人間にさせない。
もっともよく自我を実現する。ただし真実を求める。
問題を提出することは、回答より重要である。
鋭敏、冷静を保ちさえすれば、考えの変わることを気にかける必要がない。
生活は芸術より豊富である。
一人の人間の心における愛情の生活を扼殺することは、唯一の許すことのできない罪である。
生活における残酷な問題は、幸福と義務を結びつけることにある。（前出 PP.364-366）
③ロシアのプレハーノフ（1856-1918）はイプセンの個人主義はブルジョアジーのものであると考えている。彼は次のように指摘している。
人の任務は独立する人間となり、自分自身の精神を自己に集中することである。[中略]彼の唯一の任務は「敬虔な自我選択」のなかで自己を選択することである。それは生命における唯一の任務は自我発展であるかのようである。

この「貴族達」（ブルジョア社会において、精神が反抗する傾向にある人たちを指す。陳注）は、社会的勢力ではなく、ただ孤立した個人というだけである。彼らは一層熱心に個人崇拝に陶酔する。（前出 P.166）

イプセンの個人主義は確かにあの「少数に対する信仰」に適い、この信仰はまったく現代資本主義世界の資産階級の「思想界」における本質である。（前出 P.181）

以上のようなイプセンの「個人主義」解釈を比較すると、イプセンともかかわる胡適の「個人主義」解釈は、社会的視野の中の「個人主義」、個人の発展がそのまま社会へと連動する「個人主義」という傾向をもっていたことが分かる。

27　注１にも書いたように、胡適の人生観、宗教を代表するのは「『科学と人生観』序」（1923 年 11 月）、「不朽」（1919 年 2 月）と「イプセン主義」（1918 年 6 月）など 3 つの文章である。書き上がる順番によって、人生観としてのイプセン主義はテクストの「イプセン主義」だけではなく、他の 2 つの文章を参考にする。

28　赤塚忠『大学　中庸』（明治書院 1967 P.44）によりその主旨を以下に引用する。「遠き（よき）代の、（聖王となってその）英明な徳を天下に（くまなく）明らかにしようとしたものは、それに先だって（一国の明君として）その国を（安らかに）治めた。一国を（安らかに）治めようとしたものは、（さらにもとに返り）、それに先だって（一家の長として）その家族をよく和合させた。家族をよく和合させようとしたものは、（さらに）それに先だって自分自身を（善良に）修めた。自身を（善良に）修めようとしたものは、（さらに）それに先だって自分の心を正しく

した。（中略）心が正しくなってこそ、身が（善良に）修まる。身が（善良に）修まってこそ、家族が和合する。家族が和合してこそ国家が（安らかに）治まる。国家が（安らかに）治まってこそ、天下が平和になるのである。（それ故、人を治めるには、）天子から庶人に至るまで、ただただたれもみな自分の身を（善良に）修めることを根本（のつとめ）とする。」

29　前出「介紹我自己的思想」

30　前出「介紹我自己的思想」

31　前出「介紹我自己的思想」
「この文章が民国 7、8 年頃（1918、1919）に最も大きな興奮作用と解放作用を発揮できた所以も、まさにそれが提唱した個人主義が当時確かに最も新鮮で最も必要な注射だったからこそである。」

32　張之洞「勧学篇」

33　前出『明治日本および中華民国におけるイプセン受容―恋愛・貨幣・国民国家のドラマ』P.28